

2020年度 横浜市ESD推進コンソーシアム実践報告書

横浜市 ユネスコスクール ESD推進校実践報告

令和2年度 文部科学省SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業



2021年2月 横浜市教育委員会

横浜市では、2016年度の文部科学省「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」の採択を受けて以来、全ての横浜市立学校で、ESDの理念に基づく教育が広がるような取組を展開してきました。事業の推進においては、多様な組織が参加・連携した「横浜市ESD推進コンソーシアム」を立ち上げ、以下のようなESDに関連するキーワードのもとで、取組が展開されてきました。

表：「横浜市ESD推進コンソーシアム」で活用されてきたESD関連のキーワード

- 持続可能な開発のための教育(ESD)
- ホールスクール・アプローチ
- 多様な主体とのパートナーシップ
- ESDのレンズ：見直す(批判的)、つなげる(統合的)、変わる(変容的)、地域で世界へ(文脈的)
- SDGsの特徴：普遍性、包摂性、参画性、統合性、透明性
- SDGsを学ぶ、SDGsに学ぶ、SDGsと学ぶ
- カリキュラムデザインと学校運営の連関
- 未来につながる、未来につなげる
- 「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会
- 学びの可視化、プログラムの評価

本取組では、当初からESDを学校全体で取り組むこと(ホールスクール・アプローチ)を軸に据え、展開をしてきました。「ホールスクール・アプローチ」は、(1)学校におけるガバナンスと能力開発、(2)学校施設の運営、(3)カリキュラムの編成・実施と教授・学習活動、(4)学社連携の4領域に配慮をしたものであり、その相互性が強調されたアプローチと言えるでしょう。本取組においても、カリキュラムデザインと学校運営を連関させたアプローチを採用し、さまざまな取組を「見直す、つなげる、変わる、地域で・世界で」のレンズで考えることを、教職員、学校関係者、保護者、児童生徒とともに深めてきました。地域と世界、学級・学年と学校、教科と総合、能力と態度などのように、一見、異なる文脈で語られることが多い用語を関連づけ、学校全体が持続可能性に向き合う取組を深めてきました。

令和元年度においては、文部科学省「SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業」(教育(学習)効果の評価・普及)の採択を受け、学びの可視化やプログラムの評価に挑んできました。とりわけ、この数年の「変容」は、教職員、児童生徒らが、持続可能な未来に向けた教育・学習について主体的に考え、関わることにより、各々の学校の個性や文脈が活かされた取組が多く見られるようになってきました。日々の授業研究や教員研修、年度末の報告会などを通して、自身の取組を発表・共有するだけでなく、お互いのいいところを尊重し合いながら、さらに学校の個性や文脈を活かした取組として「変容」させてきている点に特徴が見られるようになってきました。これらの個性ある学校の変容は、当初からESDを学校全体で取り組むことを軸に据えるという「ホールスクール・アプローチ」によるものだと思っています。今日では、ESDは、持続可能な開発目標(SDGs)の達成を可能にさせるもの(enabler)であると言われていています。さらに、2020年にユネスコにより発表された“ESD for 2030”では、個人の変容と社会の変容の連動性が今まで以上に強く言われています。

この冊子に見出される知見が、横浜の、国内各地の、ひいては世界各国の持続可能な未来に向けた教育のさらなる展開の一助になれば幸いです。

横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター
東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授

佐藤 真久

本書について

昨年度に引き続き、今年度も文部科学省の「SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業」の指定を受け、中でも「教育（学習）効果の評価・普及」の分野で、研究を推進しています。横浜市教育委員会として、2020年度はユネスコスクール4校を含む、ESD推進校を23校指定し、SDGs達成の担い手育成（ESD）推進事業を実施してきました。

この事業を進めようとした時点では、既にCOVID-19拡大防止のため、全国的に緊急事態宣言が発出され、約3か月もの間、全国の学校が一斉休業になりました。再開後も通常の学校運営が難しい中、「本当にESDの推進ができるのだろうか」、様々な制限があるなかで、「ESDの推進といっても何をしたら良いのだろうか」という懸念もあり手探りの状態でした。しかし、各校で取り組んだ実践報告を見ると、「誰もが経験したことがない事態の中での実践ではあったが、長年に渡り、ESD推進を行っている本校ならではの取組ができた」「コロナ禍で活動が制限されている中でも自分たちの考えや行動を積極的に発信し、広げていこうとする生徒の意識や行動力の高まりが感じられた」といった記述が随所に見られ、ESDを推進してきた強み（価値）を改めて感じました。

換言すれば、COVID-19という「持続不可能な状況」の中でも、できないことよりも、できることを見つけ、教育活動全体を見直し、児童生徒にとって何が大切かを考える1年になったのだと思います。推進校の取組から教職員が自発的に学校経営に関わったり、教育的価値を問い直したりする場面で、「ESDの視点」が有効であったことを、改めて確信することができました。

本報告書の構成は次の通りです。

第1章では、ユネスコスクールを含むESD推進校の取組について掲載しました。「1 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・

能力」「2 SDGs達成の担い手（ESD）の視点で取り組んだこと」「3 ESDによる『変容の視覚化』の手法」「4 ESDによって引き出すことができた価値」から、教育活動がどのように学校教育目標に位置付いているかを示すことで、手段と目的の関係を明確にしました。

「ESDによって引き出すことができた価値」は「教育（学習）効果の評価」そのものです。また、より詳細な事例として、カリキュラム・マネジメントの視点から、ESDの構成概念と能力態度を研究している横浜市立三保小学校の実践とロジックモデルを用いた協働型プログラム評価の研究をしている横浜市立みなとみらい本町小学校（以下、MM本町小学校）の実践について掲載しています。

第2章では、昨年度に引き続き、東洋大学の米原あき教授のMM本町小を事例とした2年目の取組の分析について掲載しています。「協働型プログラム評価」という考え方を導入し、2年目ならではの課題も含めて検証し、不確実な時代ならではのレジリエントな学校への展望も含め論述されています。

第3章では、2020年10月に各推進校に対して実施した児童・生徒と教職員の「ESDに対する知識・態度・行動」に関する質問紙調査の結果を東京大学の北村友人准教授が分析をしています。この調査は、地球規模課題として広く認識されている諸問題に関して児童・生徒や教職員がどのような知識を有しており、それらの問題に対応するためにいかなる態度や行動をとっているのかという実態を把握し、今後の課題を明らかにすることを目的としており、調査結果と分析の速報を掲載しました。

第4章では、横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会、ESD推進校研修・情報交換会について掲載しました。

最後に、本市のこれまでのESD推進事業をコーディネーターとして支えてくださっている東京都市大学佐藤真久教授に深く感謝し、本研究が広く普及することを願うものであります。

目次

はじめに	横浜市ESD推進コンソーシアム・コーディネーター 東京都市大学大学院 環境情報学研究科 教授 佐藤 真久	1
本書について		2
目次		3
第1章 横浜市立 ユネスコスクール・ESD推進校の実践事例		4
1	永田台小学校	5
2	幸ヶ谷小学校	7
3	市ヶ尾中学校	9
4	東高等学校	11
5	三保小学校	13
6	羽沢小学校	15
7	日枝小学校	17
8	恩田小学校	19
9	荏田西小学校	21
10	港南台第三小学校	23
11	南本宿小学校	25
12	みなとみらい本町小学校	27
13	大門小学校	29
14	中和田中学校	31
15	西本郷中学校	33
16	西柴中学校	35
17	神奈川小学校	37
18	白幡小学校	38
19	中尾小学校	39
20	相沢小学校	40
21	本牧中学校	41
22	小田中学校	42
23	中川西中学校	43
	(1～4の学校はユネスコスクール・5～16の学校は継続校・17～23は新規校)	
■カリキュラム・マネジメントをESDで進める実践事例		45
	ESDの指導と評価の研究報告 <三保小学校> 主幹教諭 新海 秀美	
■ESDの視点で学校全体の教育活動を見直す実践事例		47
	ロジックモデルを用いた協働型プログラム評価の実践 ーホールコミュニティで育成する「みな」と「みらい」を創る子ー <みなとみらい本町小> 主幹教諭 高原 洋介	
第2章 協働型プログラム評価によるESDスクール・マネジメント実践に関する 調査研究報告書ver. 2 (理論編)	横浜市ESD推進コンソーシアム委員 東洋大学 教授 米原 あき	52
第3章 持続可能な開発のための教育 (ESD) に関する質問紙調査の結果 (速報)	東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村 友人 特任助教 佐々木 織恵 特任研究員 八木 恵里子	74
	調査質問紙	79
第4章 本年度の横浜市ESD推進コンソーシアムの取組 (教育委員会としてのESD推進)		86
	2020年度横浜市ESD推進コンソーシアム交流報告会	87
	SDGs推進校研修会・情報交換会	92

第1章

横浜市立 ユネスコスクール
E S D推進校の実践事例

1 横浜市立永田台小学校

学校教育目標「一人一人が輝く永田台」

知：学び続ける 徳：ともに豊かに 体：心も体も元気に 公：持続可能な未来を 開：地域と夢

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学校教育目標「一人一人が輝く永田台」に向けて、「豊かで確かな学び」を実現する。特に3つの視点を大事にしている。「体験」では、試行錯誤を繰り返しながら学ぶことができるようにすること。「言葉」では、自分の思いを表現する言葉を持ち、語り合う豊かな学びをめざすこと。「協働」では、つながり合い、認め合い、協力しあって活動することのよさを実感できるようにすることである。



○よもばん買い物プロジェクト（個別支援学級）
地域のパン屋でお買い物をする活動を通して、生きる力とともに地域への愛着が高まった。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

自らの問いを大切にし、解決に向けて探究的に学習を深める「生活科・総合的な学習の時間（かがやきの時間）」での取組を紹介する。

★全学年のかがやきの時間の活動が11番「住み続けるまちづくり」につながっています。

○幼保小交流つながりプロジェクト（1年）

球根を同じ時期に植えるために、永田台小から幼稚園・保育園に届けた。互いに思いをもって花を育て、緑を大切にする心を育みたい。



○玉ねぎの皮を使って草木染め（3年）

廃棄される給食の玉ねぎの皮を使ってオリジナルハンカチの草木染めをした。廃棄するものにも価値のあるものがあることに気付いた。



○笑顔を取り戻そう！コロナに負けるな！永田台マラソン（6年）

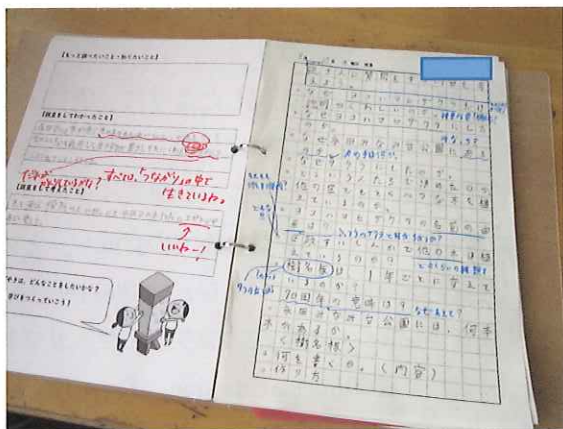
コロナ禍で地域に笑顔と元気を取り戻そうとマラソン大会（運動）を企画した。地域住民、永田台小の子どもたちなどの参加者（自主参加）計50名が笑顔になった。3番の「健康と福祉」につながった。



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

○一人ひとりの子どもの気づきや変容をとらえるポートフォリオ評価

全学年にA4 2穴ファイルを配付した。そこにかがやきの時間の活動での学びや気づきを毎時間書き込んでファイルに綴じている。子どもたちのふりかえりには、担任がフィードバックをする。そのフィードバックも気づきを促す問いかけを大事にしたフィードバックを心がけることで、子どもたちが自分の考えを深め、次の問いを生み出すきっかけになっている。



↑自分で気づきや問いを書き込み始める児童



↑全学年に配付しているファイル

○全学年の活動を可視化することができる掲示の工夫「かがやきストリート」の作成

本校には、全学年が通る廊下がある。その廊下の柱を活用し、かがやきの時間の活動の足跡を残している。この取組により、どの学年でどのような活動をしているのか見ることができる。また、ホールスクールアプローチとして、担任や学年の先生だけではなく学校全職員が

「こんな団体とつながってみたら?」「このアイデアどう?」など日常から声をかけ合い、職員間での対話のきっかけを生むことができる。その対話は教職員間だけではなく、児童と職員との会話のきっかけにもなるので、ホールスクールアプローチにより学びがより深まっている。



↑学年ごとの柱状に掲示している

○子どもの変容を見取る教職員の育成

子どもの変容を見取る上で、教員一人ひとりの「見取る力」は欠かせない。その力を向上させるために、授業研究会では数名の子どもの45分間の授業の行動観察をし、その子どもの姿を糸口に授業内容や問いを深める研究協議会を行っている。研究協議会を重ねることで、教員の見取る力は確実に上がり、日々の授業にも活かされている。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

- ・予測不能な時代の中でも、ESDに取り組むことで、一人では解決できないことも、誰かに相談をすれば解決することができることや、困っているときは地域や教員などの身近な大人が協力してくれることを、実体験を伴って、実感することで、「自分の小さな力は大きな力になる」という認識をより確かにすることができた。
- ・ふりかえりを大事にすることで、自分の中の問いを見つめ直すきっかけとなり、思いを言語化することで学びがより豊かになった。また、ESDにおける資質・能力(批判的思考・未来の計画性・多面的総合的に考える力)の高まりにつながり、ESDをより深化させている。

2 横浜市立幸ヶ谷小学校

学校教育目標

自分 友だち 社会の幸せをつくる子ども

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

新しい学習指導要領には、教育課程全体を通じて教科横断的に育成を目指す資質・能力が問われている。学校教育目標の達成に向けて、どのような資質・能力を本校として育成すべきなのか、その視点に立って協議した結果、「目指すべき子ども像」を昨年度、完成させた（以下、子ども像）。



図1「目指すべき子ども像」(2019)

学習段階	資質・能力	育成すべき資質・能力
1-1	基礎的・基本的な知識・技能	基礎的・基本的な知識・技能の習得
1-2	基礎的・基本的な知識・技能の活用	基礎的・基本的な知識・技能の活用
2-1	基礎的・基本的な知識・技能の活用	基礎的・基本的な知識・技能の活用
2-2	基礎的・基本的な知識・技能の活用	基礎的・基本的な知識・技能の活用

図2「資質・能力表」(2020)

で落とし込んだものである。発達段階が系統立てられていると共に、「学校教育目標」、横浜市の教育が育む力（知徳体公開）の5つの視点、ユネスコが示した「ESDの学習の柱」の3つの視点との整合性が図られている。

本年度は上記を活用しながら重点研究を一つのポイントとしつつ、日々の実践に臨んだ。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

本年度はコロナショックという未曾有の事態の中で、「持続可能な社会の創り手」、「SDGs達成の担い手」の育成にいかに関わり手をかき全教職員で模索する日々であった。様々な実践が行われたが、ここでは、主に重点研究の取組について紹介する。

本年度の重点研究は、先記したように「資質・能力表」を活用しながら、昨年度に続き「子どもと教師の変容を促す効果的なリフレクション研究～自分、友だち、社会の幸せをつくる資質・能力の育成～」とのテーマで児童と教職員のリフレクション（Reflection以下、リフレクション）の実践に取り組んだ。リフレクションは、OECD(Organisation for Economic Cooperation Development 以下、OECD)が定める国際標準の学力であるキー・コンピテンシー（資質・能力）の核心であり（ドミニク：2006）、OECDが定めた「The Learning Framework2030」には、リフレクションが位置付けられている。また、ユネスコの「自分自身と社会を変容させるための学び」の特徴を表すキーワードでもある（曾我：2018）。昨年度の成果を踏まえ、より深いリフレクションを行うため、より深く授業者に問いを重ねる形式で重点研究を進めた。例えば、授業後の研究協議会では、授業者の自評を踏まえつつ、参観者が小グループで話し合い、授業者への問いを一つ決める。出された各グループからの問いをもとに、ファシリテーターが授業者の内省を深めていく。授業者のリフレクションの深まりを聞きながら、参観者は授業者の思いや思考の揺れを意味付けすることで、自身の実践を顧みることを意図した取組である。

授業者からは、「自分では気付かなかった視点を、みなさんからの問いで気付くことができた」また参観者からは「〇〇さん（授業者）の振り返りが、どんどん

深まっていることが分かった。また〇〇さんの授業のこだわりの裏に、子どもたちへの思いがあるのがわかった。」などの声が聞かれた。授業者自身がメタ認知の視点から、内発的に自己を顧みる効果や同僚性の高まりが出ており、一般的に本校で行われてきた反省点を指摘し合う授業研究会では得られなかった成果である。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

(1) 児童の変容～価値変容、行動変容～

「変容の視覚化」の一例として4年生の学級の実践を紹介する。この学級では、児童たちが「横浜の海の大切さを伝えたい」との願いをもち学校の壁画作成の実践に取り組んだ。単元ごとの終末には、「持続可能な横浜の海とは？」との問いへの応答を考えることで、児童の変容を明らかにするリフレクションの試みがされていた。ノートには、定期的に振り返った跡が記されており、児童も自分自身の思考の変容を知ることができる(写真1)。ある児童は、当初、海に対する愛

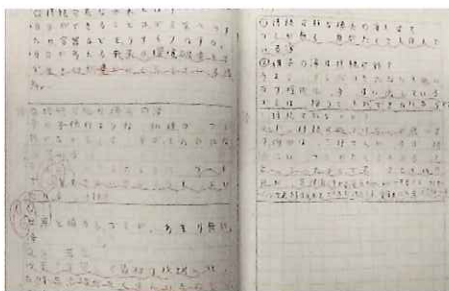


写真1「児童のノート」

着がなかったが、回を重ねるごとに、「持続可能な横浜の海」の姿について考察をしてい

くだけでなく、自主的に海岸の掃除をするようになるなど、価値の変容から行動の変容としてつながる姿が見受けられた。このように、ノートの記述を通して児童の価値の変容が視覚化されるだけでなく、行動に至る変容として視覚化される実践がなされた。

(2) 職場環境の変容

休校期間中、本校のESD推進部を中心に「今こそできることは何か」を考え、昨年度より行っている職員室レイアウト変更をさらに一歩進めた。例えば、文房具類の見える化や物品の整



写真2「文房具の見える化」

理をすることで、職員室内に空間が確保された(写真2)。このことによって、本校の長年の課題である手狭な職員室に、より多くのスペースが生まれ、動線の確保がなされた。この効果は、職員からも大変好評で、持続可能な働き方に大きく寄与している。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本年度は、誰もが経験していない事態の中での実践ではあったが、長年に渡りESD推進を行っている本校ならではの取組ができたと考えている。重点研究はもちろん、運動会をはじめとする諸行事においても大幅な変更が必要とされた。その度に、本校では教職員、地域が一丸となって知恵を出し合い、多くの工夫が施された。それは単に密を避ける、消毒をこまめにする、といったことではない。教育の質や児童の喜びを下げることなく、かつ職員、地域にとっても負担を強いるだけでない取組を一つ一つ実現していった。その評価は、各種のアンケートからも明らかになっている。長年、ユネスコスクールとしてESDを柱に、地域とつながりながら、学校教育目標の実現に取り組んできたからこそ、このような成果が出せたのではないだろうか。



写真3「職員室に飾られた掲示」

休校期間中に、教職員の思いが付箋に書かれたポスターが職員室に飾られた(写真3)。付箋を読むと、教職員一人ひとりが、今回の事態を冷静に受け止めつつ、学校再開に向けて自分自身に取り組めることを前向きに記しているのが分かる。児童の資質・能力の育成が求めら

れるからこそ、こうした職員の資質・能力、そしてつながりを育む職場づくりに向けて、ESDを柱に取り組んでいきたい。

引用文献

- 曾我幸代 (2018) 『社会変容をめざすESD:ケアを通じた自己変容をもとに』学文社。
- ドミニク・S・ライチェン/立田慶裕監訳 (2006) 『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書店。

3 横浜市立市ケ尾中学校

学校教育目標 教育理念 『自立貢献』

- 自分で解決する力を大切にします。(知・公・開)
- 心豊かに生きる力を大切にします。(徳・体)

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

- ・持続可能な社会の創造に貢献する力
- ・グローバル化の中で生きる力
- ・言語能力

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

1. ESDの視点を重視する教育活動の視点

「市中から世界を変えよう」を合言葉に、生徒会本部役員を中心とした各委員会の活動や各教科の授業などでESDに取り組んでいます。

委員会	活動内容	活動内容	活動内容
生徒会本部役員	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	「市中から世界を変えよう」	SDGsの学習、SDGsの啓発活動
3年次委員会	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	ポピュラー音楽の制作	SDGsの学習、SDGsの啓発活動
2年次委員会	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	創作	SDGsの学習、SDGsの啓発活動
1年次委員会	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	「Life with Reading」	SDGsの学習、SDGsの啓発活動
生徒	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	一人一冊	SDGsの学習、SDGsの啓発活動
教師	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	SDGsの学習、SDGsの啓発活動	SDGsの学習、SDGsの啓発活動

・環境委員会

「石けん教室」

SDGsの目標達成に取り組んでいる「太陽油脂株式会社」から講師を招き、地球環境への影響に配慮した取組として、自分たちができることは何かという視点で学ばせていただきました。「環境にやさしい生活」に気付かされる時間となりました。

・図書委員会

「Life with Reading ～読書の秘訣～ 創造的読書のパターン・ランゲージ」

「株式会社有隣堂」のご協力のもと「ワークショップ」に取り組みました。読書のコツや楽しみ方を「言語化」することで、そこから生まれるコミュニケーションを楽しみながら、活動しました。質の高い読書の方法などについて学びました。

・生徒会本部役員



瀬谷区の相沢小学校とリモート交流を行い、お互いのSDGsの取組について、学びの成果や実践などを伝え合いました。離れていても、人とつながり、情報交換ができたことは、とても良い刺激となりました。交流をもつことの大切さを改めて実感しました。

2 持続可能な社会の実現とSDGs達成に向けて

・市中オリジナルマイバッグ

3年前から「海洋プラスチック問題」について課題意識をもち、中央委員会を中心に学習を進めてきました。まずは、講師を招き、問題について学習したり、「学活」や「総合的な学習の時間」などで学習したことを発信したりして、「海洋プラスチック問題」について全校生徒に伝えました。次に、「自分たちができきる」ことを真剣に考え、「マイバッグ」を製作しました。完成した「マイバッグ」を全校生徒に配布し、「自分たちの行動が世界を変えることにつながる」という具体的な行動のきっかけとなりました。

今年度は、「マイバッグを地域に広げる活動」を行いました。自治会や町内会などで生徒会本部役員が「マイバッグ」の取組を説明しました。



多くの場所で取組に賛同してもらい、「マイバッグ」を購入してもらったり、区役所の協力のもと、地域のイベントでの販売活動を行ったりすることができました。「マイバッグ」について、地域の広報誌や新聞社から取材を受けて、取組を発信することもできました。今年度の活動から、自分たちだけの行動で終わるのではなく、そのことを発信し、広げていこうとする意識や意欲をもった生徒たちが育ってきました。さら

に、「地域」に活動を広げることで、「地域の変容に貢献できる学校」としての役割が「持続可能な社会の創造」において、とても重要となってくると学ぶことができました。



・各教科

【 国語 】

学校司書と連携し、図書室にある本を1冊選びSDGsとの関連を考え、紹介するポップを作る授業を行いました。SDGsを達成させるヒントが身近にあることを理解できる学びとなりました。



【 英語 】

朝日新聞の「169 ターゲットアイコン日本語版製作プロジェクト」に取り組みました。英語で書かれた原文を読み、自分で調べ学習を行い、具体的行動につながる一人ひとりの心に残る日本語コピーを製作しました。

【 総合的な学習の時間 】

1学年は、「SDGsの理解を深める」、2学年は、「身近な課題解決に向けた考え方や行動力」、3学年は、「日本や世界の問題について考える」など、各学年でテーマをもってSDGsの学習に取り組みました。SDGsの達成に向けた「今」の自分たちの意識や考えの変容に気づき、行動に移していくことの大切さを学ぶ時間となりました。

【 道徳 】

よりよい学校生活、集団生活の充実を目指し、生徒総会の意見としてあがった「自動販売機の導入」のよりよい在り方について、討議を行いました。「便利だから、ただ必要」というだけでなく、他の生徒や教員の意見、SDGsに達成に向けて取組んできた市ケ尾中学校としての視点等から、熟思し、話し合いが行われ、他者と考えを共有し、自分なりの考えをもつことができました。

した。持続可能な社会に向けて取り組む、生徒たちの意識の変容を見取ることができました。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

「持続可能な社会づくり」を意識した委員会活動を通じた、生徒たちの「ESDを通して育成したい能力・態度」の変容を見取るため、振り返りアンケートを実施し、数値をグラフ化しました。

項目	割合(%)				
	よくなりました	できました	どちらともいえない	できなかった	全くできなかった
① 未来像を予測して計画を立てる力	5	4	3	2	1
② 行動力	30	52	15	3	1
③ 多面的・総合的に考える力	30	48	21	2	0
④ コミュニケーションを行う力	41	37	20	3	0
⑤ 他者と協力する態度	64	30	5	0	0
⑥ つなぐりを尊重する態度	50	36	13	1	0
⑦ 進んで参加する態度	55	38	6	2	0

振り返りアンケートの結果、高い数値なのが、「他者と協力する態度」「進んで参加する態度」で90%以上の生徒が2つの態度の高まりについて実感しています。一番低い数値なのが、「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」であることがわかりました。今後、ESDの視点でのアンケートを全校の生徒に実施することを計画し、本校のESDの達成度や理解度を測り、ESDの更なる推進に努めていきたいと考えています。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDを取り組み始め5年が経ち、「持続可能な社会作りの担い手」を育てる教育活動の広がりを様々な学習で感じる1年でした。コロナ禍でSDGsの活動が制限されている中でも、「オンラインでの小学生との交流」や「地域にマイバッグを広める活動」などを通して、「自分たちの考えや行動を積極的に発信し、広げていこう」とする生徒の意識や行動力が高まりました。先輩たちの取組を後輩たちが引継ぎ、発展させてきたからこそその成果でもあります。「地域の変容のために学校が情報発信していくこと」や「次の世代に取組をバトンタッチしていくこと」今後も大切にしていきたいと思えます。

4 横浜市立東高等学校

<教育理念>・あたり前のことをあたり前に出来る人間

・物事を正しく判断し、他人に迷惑をかけない人間

<学校教育目標>

・自ら学び、熱心に学習する生徒を育成します。

・豊かな心と健やかな体を育み、他人を思いやる生徒を育成します。

・社会の一員として自らの役割を果たすとともに、国際社会の発展に貢献できる生徒を育成します。

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

○「言葉の力」と「聴く力」を身につけ、論理的な思考力と高いコミュニケーション力
○「主体的な学び」の成果をもとに、より高い進路目標の実現に向けて「挑戦する力」

・多様性を尊重し、それを受け入れる価値観と多様な人々とともに、目標にむかって「協力する力」

・自分の意見をわかりやすく伝える発信力と他者の意見を丁寧に「聴く力」

・現状を分析し、目的や課題を明らかにする「課題発見力」とそれを解決しようとする「行動力」

・物事に進んで取り組む主体性と他人に働きかけ巻き込む力をもったリーダーシップ

☆これらの力を身につけることによって、学校教育目標を達成できる。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で 取り組んだこと

○イーストタイム（総合的な探究の時間）

○イーストタイム プレミアムプログラムⅠ・Ⅱ
Ⅰでは、進路選択に向けた、大学の説明
Ⅱでは、29の企業・団体がそれぞれ取り組んでいるSDGsについて、来校してプレゼンをしていただく。

○グローカリー（有志による地域学習）

○ESD委員会（緑化プロジェクト等）

○サステナブル研究部（部活動として様々なイベントへの参加）

○グローバル・シチズンシップ・キャンプ
（留学生を交えて、英語でSDGsについて二日間学ぶ）

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

生徒の振り返りを大切にしている。そのため、今年度より、新一年生には、「GCファイル」という「探究」のファイルを各自作っていて、ポートフォリオとしている。



▲グローバル・シチズンシップ・キャンプ

あらゆる取組において振り返りを行っているが、次に、例として、1年生が11月に2日間行った、「グローバル・シチズンシップ・キャンプ」についての振り返りから、いくつかを示してみる。

・世界的な課題は私たちにはまだまだ高校生だから何にも役に立たないと思っていたが、小さなことからでも必ず繋がって少しでも役に立てることを知った。

・世界の問題はたくさん知っていたけど、他人事だと思っていた、でも今回は実施にその国の人たちに直接社会問題を聞いて、改善する重要性に気づけて、助けられたらなと考えるようになりました。

・国ごとで分けられているから他人事になっていたけど、いざ同じ場所にいると自分たちと何も変わらない“一人の人”で、同じ考えを持っていたり、新しい考えを持っていたりして決して自分から遠ざけてはいけないと強く感じた。

・今までは**世界**にはSDGsにある通りの問題があると全部を知ったつもりでいたけど、この2日間で**世界**は自分の知らない問題であふれていることを知りました。

・ヨーロッパは裕福だという勝手な偏見があったが、ヨーロッパの国々でも十分に教育を受けていない人が大勢いることを知る良い機会になりました。

・前から**世界**の問題については少し知っていたが、知っていたのがインドくらいしか知らなかったが、今回はタイ、ウズベキスタン、インド（もっと詳しく知れた）パキスタン、ルーマニア、ブラジル（特にその国の問題）について知ることができて、とてもいい経験になり、もう少し視点を広げようと思った。

・SDGsについて考えているのは一部の国だけだと勝手に思っていたから、ほぼ**世界中**の人が考えていてとても驚いた。

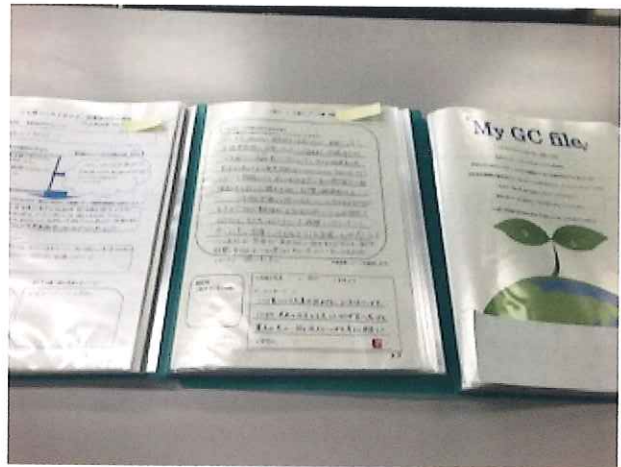
・とにかく「伝えたいという強い気持ち」が本当に大切だと思った。

今まで「間違い」を恐れていたけど、今は間違えてもいいからとりあえず言葉にしてみたいと思うようになった。

このように、「～だったが、～になった」という表現が多く使われていることと、世界とかグローバルという単語も多くみられ、生徒の視点が「身近なところ」から「世界」に大きく広がったことがよく分かる。



▲グローバル・シチズンシップ・キャンプの成果発表



▲GC ファイル

4 ESDによって引き出すことができた価値

(evaluation=評価)

国際的な広い視野

生徒は、小学校から、中学校を経て、高校生となり、思考のパラダイムを「世界」というレベルに広げている。「身近」→「世界」→「足元」というように、まさに、グローバルに考えて、ローカルに行動するという力が身につけてきている。

多様性の許容

学校以外の人たち、特に企業人や、外国からの留学生などと会うことで、生徒は、「多様性」についての自分の認識をリアルに変容させている。

問題意識・課題意識

「問題」や「課題」を、身近なこと、自分の生活というまさに「自分事」に引き寄せて、グローバルな事象について考えることができるようになってきている。例えば、気候変動と自分の行動というようにである。

コミュニケーションの大切さ=ツールとしての英語

国際語=コミュニケーションツールとしての英語の必要性を切実に感じる生徒が増えてきている。このことは、単なる「受験勉強」としての学習から、自分自身の成長=自分づくりのための学習に学びが変容してきていることを示している。

シチズンシップ=人権意識

グローバルなシチズンシップを、東高校では、「あたりまえ」にしていこうと考えている。将来の成熟した市民社会の形成にむけて、生徒一人ひとりが、自分なりに考え、行動できるようになってきている。

5 横浜市立三保小学校

学校教育目標



進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～



1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

【学校教育目標】
進んで学び、高め合う子 ～元気・勇気・根気～
【ESDテーマ】

- ㊦ らいをつくる ㊦ んきのまなび
- <持続可能な社会づくりを担う力>
- 興味・関心を広げ、主体的に学び続ける力。
- (②未来)
- 他者を思いやる心を持ち、自他を大切にす
る態度。(I多様性の尊重)
- 社会の一員として、自分の役割を進んで果たす
態度。(⑦参加)

2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で 取り組んだこと

本校は、地域の豊かな自然を活用しながら「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進しカリキュラム開発と授業実践を進めてきた。持続可能な社会づくりを担う児童の育成を目指し、環境やキャリアなどの教育課題をクロスカリキュラムにより整理し、全教科等において授業実践を進めてきた。今年度の取組は次の通りである。

I 新たな“授業研究”の形

コロナウイルス感染症の拡大によって、年間8回、全員が行っていた授業研究会を学年で1学級の授業公開に絞った。その分、指導案検討に充てていた時間を利用して、学年ごとに「ESD教材開発」に取り組む時間を確保し、授業のデザイン力や指導力の向上につなげようとした。

またICTの活用も積極的に行った。SDGsの担い手育成(ESD)推進校研修会などのZoomによって行われた研修に参加したり、校内研究会でもZoomを活用し、滋賀県立大学の木村裕先生に「教育評価を意識したESDの実践づくりの方向性」に関する講演を行っていただいたりした。授業でのロイロ・ノートの活用に向けても、夏季から計3回職員研修を行った。

II ESDを通して育成を目指す「構成概念」と 「能力・態度」の学年別重点化

今年度は、ESDを通して育成を目指す「構成概念」と「能力・態度」を学年別に重点化を図り、1年間を通しての変容を探った。

学年	構成概念	能力・態度
1年生	I 多様性 多様性を尊重する態度	㉠(参加) 進んで参加する態度
2年生	II 有限性 ものを大切にする態度	㉡(伝達) コミュニケーションを行う力
3年生	V 連携性 互いに連携・協力する態度	㉢(協力) 始者と協力する態度 ㉣(関連) つながりを尊重する態度
4年生	II 相互性 つながりやかかわりを大切にする態度	㉤(多面) 多面的、総合的に考える力
5年生	VI 責任性 責任と義務を自覚し、自ら進んで行動する態度	㉥(批判) 批判的に考える力
6年生	IV 公平性 公正・公平に努める態度	㉦(未来) 未来像を予測して計画を立てる力

▲「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点

例えば、第1学年では、ESDで育成を目指す「構成概念」【多様性】と「能力・態度」【⑦《参加》進んで参加する態度】の重点化を図り、授業研究やESDの教材開発に取り組んだ。学級活動(食育)「はしイーナちゃんになろう」では、世界で使う食器について知ることを入口とし、食事のマナーや上手な箸の持ち方を学んだ。一人ひとりが箸を持ち、歌に合わせて箸を動かしたり、実際に食材を箸で掴んだりと意欲的に学びに向かうことができた。また、栄養職員の専門性を生かして、TTで授業を行ったことで、より質の高い学びになった。



▲ 第1学年 学級活動(食育)
「はしイーナちゃんになろう」

第6学年では、「構成概念」【公平性】と「能力・態度」【②《未来》未来像を予測して計画を立てる力】の重点化を図った。理科「自然とともに生きる」では、構成概念【相互性】も取り入れ、本校の学区にある梅田川の環境と自分たちの暮らしが、生物や環境にどのような影響を与えたり、与えられたりしているのかを相互的に考えようとした。梅田川は、総合的な学習の時間「我がまちふるさと 三保」でも生物調査や自然の写真を撮影する活動を行い、梅田川の緑区遺産への登録を目指している。未来に残していきたいと強く思う場所についての学習ということで、自分事として捉えて学んだり、考えを深めようとしたりする姿が見られた。



▲第6学年 理科「自然とともに生きる」

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

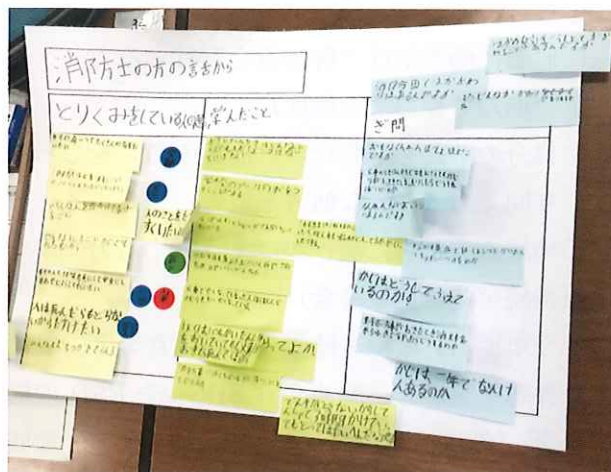
今年度から、授業における児童の思考を「見える化」するために、積極的に思考ツールを取り入れてきた。

第4学年の総合的な学習の時間「だれもが安心・安全 三保のまち」では、これまでに学習してきた内容を整理するために、KWLやPMI、フィッシュボーンといったシンキングツールを活用した授業を行った。

三保のまちを一つの視点で捉えるのではなく、「交通」「防災」「防犯」「福祉」の4つの視点から考え、それらが互いにつながりあって安心・安全なまちが実現されていることに気付けるようにするために、シンキングツールを活用

し、互いに話し合いながら学びを整理できるように授業を展開した。

今年度は紙やホワイトボードを活用して、思考ツールを取り入れてきたが、今後はロイロ・ノートのシンキングツールを活用して、児童の思考の視覚化を図っていきたい。



▲第4学年 総合的な学習の時間

「だれもが 安心・安全 三保のまち」

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

本校はESD研究を始めて9年目となるが、常に新しいものを求めて、研究・研鑽に努めてきた。今年度も、「構成概念」と「能力・態度」の学年別重点化をはじめ、新たな形での校内授業研究会やESD教材開発、ESDカレンダーや評価規準の見直しを行ってきた。

そういった研究を重ねてきたことにより、生活科や総合的な学習の時間を中心とした学習を通して、豊かな緑があふれ、温かく学びを応援して下さる地域の方々に恵まれた「三保のまち」にたくさん触れ、これからも自分たちのまちを大切にしようとする気持ちが高まった。また、SDGsをきっかけとし、世界で起きている出来事への関心が高まり、自分事として考え実行しようとする姿勢が見られるようになってきている。

今後も、指導方法の一層の工夫や改善を図るとともに、「ESDの指導と評価」についてさらに研究を深めていきたい。

6 横浜市立羽沢小学校

学校教育目標

笑顔いっぱい(E) すこやかいっぱい(S) 大好きはざわの人とまち(D)

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

- 最後まで取り組む力（主体性）
- 他者に働きかけて解決策を実行する力
（進んで参加する態度）
- 自分の考えをもちながら他者の考えをしっかりと聞く力（多様な他者と協力）
- 地域の人たちに働きかけようとする力
（持続可能な地域社会）

今年度も、環境・健康・福祉・食育等、現代的な課題を整理し、関連するSDGsやESDの構成概念、「教科横断的な学習」を意識したり、地域人材の活用を積極的にしたりしながら、生活科、総合的な学習の時間を核にして、課題解決型の学習を進めた。

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の 視点で取り組んだこと

「自ら考え 学び続ける子の育成」をテーマに、地域の材を生かしながら生活科や「はざわ」（総合的な学習）の時間において児童が地域社会と豊かに関わりながら「コミュニケーション」や「つながり」を重視した学習に取り組んだ。

3年「羽沢の畑で、育てたい！ 作りたい！！」

「食べたい!!! ～豆腐の巻～」

関連SDGs 「飢餓をゼロに」「つくる責任 使う責任」
構成概念「相互性」（人を取り巻く環境に関する概念）

子どもたちは「農業を体験したい」「自分たちで育てた物で何かを作りたい」という思いをもっていた。どのような野菜を育てたいか話し合うと、種蒔きや収穫等の時期が話題となった。いくつかの候補が上がるなか、さまざまな加工方法がある大豆を選んだ。そこから、自分たちが育てている津久井在来大豆で豆腐作りをされている豆腐屋さんにつながった。

プロが作った豆腐の試食で味や食感のよさに驚いた経験から、自分たちで話し合い、協力し合っ
て育てた大豆の豆腐作りを成功させることを目指し、くり返し豆腐作りにチャレンジした。



4年「伝えよう！はまみらいの魅力」

「広めよう！ありがとうの輪」

関連SDGs 「つくる責任 使う責任」「陸の豊かさを守ろう」
構成概念「連携性」（人の意思や行動に関する概念）

きれいに咲く、はまみらいの花を見て、「自分たちも育ててみたい」という思いをもち、本活動がスタートした。はまみらいの苗を手に入れるにはどうしたらよいか調べ、ローズプロジェクトの方とZOOMで交流し、苗をいただくことができた。ローズプロジェクトの方と関わることを通して、はまみらいを大切にしているローズプロジェクトの方の思いに気付き、自分たちにもできることはないかと考えた。花壇に植え替えたり、知ってもらふ方法を考えたりする中で、一人ひとりのはまみらいに対する思いが高まり、はまみらいの魅力、ピンクのバラの花言葉である「ありがとうを伝える」というよさを広めたいと活動している。



5年「つくろう！羽沢ビオトープ」

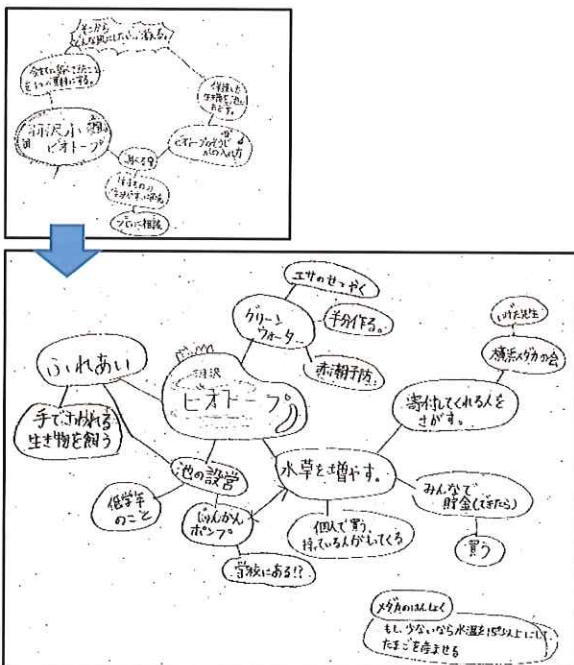
関連SDGs 「住み続けられるまちづくりを」「陸の豊かさを守ろう」
構成概念「相互性」(人を取り巻く環境に関する概念)

学校に以前からある観察池に着目し、そこを改良して「羽沢ビオトープ」をつくろうという思いをもち、本活動がスタートした。最初は濁っている観察池の水抜きに抵抗がある児童もいたが、池にいた金魚やメダカを保護したり、観察池をつくった元本校職員にこれまでの経緯や横浜メダカについて教えてもらったりしていく中で、「生き物が過ごしやすい環境にするにはどうしたらいいか」ということをそれぞれが考えるようになった。よりよい「羽沢ビオトープ」の造成に向けて、一人ひとりが主体的に取り組んでいる。

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

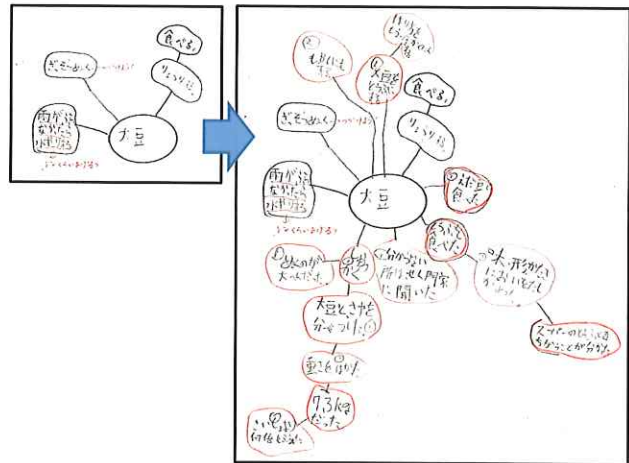
児童の意識変容をウエビングマップでとらえる。(今年度は全学年で単元の立ち上げ時と単元のまとめ時の2回実施。)

【5年生の児童の意識変容】



観察池という条件の中での生き物が生きやすい環境の有限性に気づき、その課題を自分の考えをもちながら、他者と協力する態度が育ちつつある。

【3年生の児童の意識変容】



大豆からいろいろな食べ物ができると知り、地域の農家の方や逗子の豆腐屋さんとのつながりを意識する連携性にも気づいた。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDに継続して取り組むことで身の回りや地域社会で起きていることを自分に関係することとして捉えられるようになり、地域社会から私たちを取り巻く社会や環境に興味を持つ児童の姿も見られるようになってきた。今後知識の広がりや行動変容を客観的に見取るだけでなく、一人ひとりの児童が自分を振り返り、自身の変化に気づけるようになればと思っている。

サステイナブルマップ*を更新し、校内に掲示することで、児童や教職員がマップに登場する材や人物の多様性を実感できた。多くのプロの存在に憧れたり、自分たちと地域・社会とのつながりを意識したり、社会貢献の可能性を感じることやマップの中で誰もが安心して豊かに暮らしていることを感じ取ってくれることを願っている。



羽沢サステイナブルマップ 2020 (職員作成)

*サステイナブルマップ…地域や学校の良いところを、大きな地図にしたもの

7 横浜市立日枝小学校

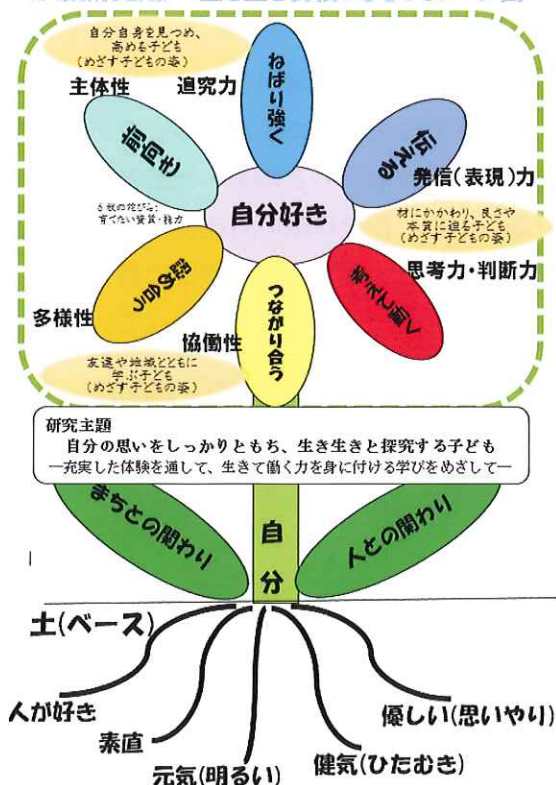
学校教育目標

生き生き日枝っ子

1 学校教育目標とESDを通して育成したい 資質・能力とのつながり

学校教育目標である「生き生き日枝っ子」の具現化を目指し、自分たちが生活している学校やまち等を中心に日々気づき、課題をもったり感動したりする中で、どうしたらよりよくなるかを判断し、「解」を見つけていくことができる「生きる力」の育成を図っている。「生き生き日枝っ子」をより具体的にイメージできるように、全教職員で「生き生き日枝っ子」の姿について話し合った。全教職員が「土」となり、子どもたちのもつ潜在的な能力を耕していくことで、種から「花」となる子どもたちが伸び伸びと成長し、6つの力「粘り強く」「伝える」「考えて動く」「つながり合う」「認め合う」「前向き」を身に付けていくことができると全教職員で確認した。これらの力を高め、また相互に関連させながら働かせることによって、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考えた。

学校教育目標「生き生き日枝っ子」のイメージ図



2 SDGs達成の担い手育成(ESD)の視点で 取り組んだこと

ESD (SDGs) という視点をもって、学校教育目標「生き生き日枝っ子」を教職員のみならず、一人ひとりの子どもが共有し、自尊意識を高める取組を続けている。

【生活・総合】

年間を通して子どもが問いを立てながら問題解決学習に取り組み、学校周辺を流れる河川の調査、公園の環境整備、古着のリユース、昔遊び等を通して、学習を実践してきている。特に今年はコロナ渦においてもお互いをエンパワメントし合う姿が多くみられた。

2年4組：「日枝っ子アクアパラダイスをつくろう！」単元目標では、ふれあえる日枝っ子アクアパラダイスを作る活動を通して、学校の近くにあるアクアパークの環境や生き物に向き合い、捕まえ方や育て方、触れ合い方を工夫することで、生き物には命があり、それぞれの知恵を働かせて育てていることに気づき、川や海、アクアパークの自然に親しみ、どの生き物も大切にしようとするとともに、環境保全に取り組む。



5年1組：「地球に PEACE☆HIECCO バッグプロジェクト」単元目標では、古着を活用して制作したエコバッグを広げる活動を通して、環境問題に関心を持ち、古着を活用しながら身近な環境をよりよくしていきたいという思いをもつことができる。また、古着を活用しながら環境に配慮して活動する団体や企業と関わることを通して、その思いや願いに気づき、大切に使い続けるとともに、日枝のまちの一員として、日枝のまちの人に喜んでもらえる工夫・取組を考え、行動しようとする。



【SDGs は学校図書館から】

学校図書館司書が中心となり、学校図書館内にSDGsコーナーを設置。意識的に本を選べるようにしている。



【この指とまれプロジェクト】

教職員が生き生きと働くことで、生き生きとした子どもが育まれる。事務職員が中心となり、企業や施設と連携し、様々なプロジェクトの活動が行われている。

- ・日枝小オンラインプロジェクト
- ・働く場改革プロジェクト
- ・障害者福祉施設×日枝小学校協働プロジェクト
- ・職員室⇄教室移動バッグ製作プロジェクト 等



3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

【体験の充実による行動の変化】

材に対して体験を通してかかわっていくことで、その対象への知識・理解が深まり、問題を自分事としてとらえ、自ら解決していくことができる。2年4組「日枝っ子アクアパラダイスをつくろう！」では、子どもたち一人ひとりが川の汽水域にいる海の生き物を飼育することで、その生き物に対する知識や理解が深まっている。塩分濃度を調べたり、住処を作ったりして、生き物の問題に向き合いながら、試行錯誤しながらよりよい環境を考えている。

【振り返り】

自らの気づきや感じたことを文章に表し、蓄積していくことで、自らの思考の深まりを実感し、次の活動につなげていくことができる。また、子どもの気づきを視覚化し、今後の計画や支援を子ども一人ひとりの実態に合わせて組み

立てていくことができる。

2年2組「SDGsをさがせ！」実践後の振り返り

ぼくはさすがにねえすていーじーすりあるからえすていーじーすりすていーじーすり思いました。

あんまりSDGsにかんけいなさそうな本をとったけど、うちにもあつたから、ほかの本も、あるのかなと思いました。

【SDGs サurvey】

SDGsにまつわる50の質問に答えることを通して、SDGsに関わる関心・意欲・行動を分析することができる。個人ごとに結果を蓄積し、項目ごとの変化を見ることで、自身の変容を感じることができる。また、学年ごとの結果を比較することで、年齢に応じた意識の変化や違いを考察することができる。

コロナウイルスの影響により、年度初めに調査をすることができなかったため、年度末に全学年で実施予定である。

二次元コードを貼付してあるので、皆さんの学校でもやってみてください。

JEI SDGs 未来の旗へようこそ、
タイムマシンによって、2030年の世界へ、何が見えますか

ここには、SDGs(持続可能な開発目標)・サステイナブルな開発目標・SDGsという、2030年までの世界に向けた持続可能な開発目標の17の目標について、だれもひとりぼっちにならない、むずかしくない、わかりやすい、みんなの理解を深めてくれる、わたしたち、そして、わたしたちのこどもたち、そのこどもたちのこどもたち、皆様に、豊かに、この地球に住みつづけることができる事業。また、今のあなたのお考えを、50の質問に答えていただく、無料のあなたのSDGsの行動指針が書けます。

NEXT ▶



4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

子どもたちが充実した体験をすることによって、一人ひとりがより強く思いや願い、疑問や課題をもち、体験を繰り返しながら協働して問題解決を図ることによって、子どもたちが伸び伸びと成長し、子どもたちに将来生きて働く力が身に付き、予測困難と言われるこれからの時代を強く、幸せに生き抜く力になるのではないかと考える。

何よりも子ども同士が励まし合い、支え合い、元気づけ合い、笑顔あふれる学校にしよとする姿が見られるようになったことが、大きな成果である。

8 横浜市立恩田小学校

学校教育目標

「自ら学びともに豊かな生活を創り出す子どもの育成」
～思いやり すずんで行動 だれとでも協力 恩田の子～

1 学校教育目標とESDを通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標に深くつながるものとして、下記の資質・能力に重点をおいて様々な教育活動を進めている。

- ・多面的・総合的に考える力
- ・コミュニケーションを行う力
- ・他者と協働する態度
- ・つながりを尊重する態度
- ・進んで参加する態度

2 SDGs達成の担い手育成（ESD）の視点で取り組んだこと

総合的な学習の時間・6年

【62ジャムセッション～^{きわみ}極～】

- SDGs目標** ②地産地消！恩田の実
⑩みんなが笑顔になる活動

＜単元目標＞

さまざまな実を収穫し、恩田小学校における地産地消を実現する。「もったいないをなくそう」を合言葉に、収穫できる実の加工の仕方を追究する活動を通して、創意工夫する力や発想力を育み、困難な状況でも考え、行動し続けることができる、しなやかな強さ（心）を育てる。

ESD視点

＜構成概念＞ Ⅲ有限性 V連携性

Ⅲジャム作りを通して、食料や資源などには限りがあることを意識し、困ることなく食事することができていることに感謝する心をもつとともに、不可逆的に社会が変化していることに気付く。

Vコロナの影響があることを受け入れ、この状況に応じて順応・調和し、互いに意見を持ち、連携・協力することで乗り越えていくことができるといった実感をともなった活動を進めた。

＜能力・態度＞ ③多面 ⑥関連

やりたいことをやればいいだけではなく、相手や目的、自分たちにできることとできないこと等を分析し、自分たちが取り組む「笑顔の活動」

とは何かを考えることを通して、自分が様々なものごととつながっていることを理解できるようにした。また、このコロナ禍の現況を受け入れ、どうすれば思いを実現させることができるのかと考え、学びに対する意味や価値を創造していくことができるように進めた。

具体的な活動

①6月の分散登校時に種まき（梅日記スタート）



②学年や技能実習さんの力を借りて（実践）



「コロナ禍でもこんなことができる！」と教師が楽しむ。

③収穫

収穫する活動をしている中で、他にも実のなる木が恩田小にはたくさんあることを発見。



④梅調べ

62メンバーの梅調べ



⑤いろいろな実でジャム作り

コロナ禍で学校では、調理ができず。子どもたちのアイデアで、自宅で作る。そのために、国語「私たちにできること」で保護者の方へ提案文書をつくった。



⑥コロナ禍での発信方法（実をPRする活動）

持続可能性、発信力を軸にして発信方法について考えた。
 持続可能⇒ステンドグラス
 発信力⇒動画 or TV 放送

3 ESDによる「変容の視覚化」の手法

「SDG s 17の目標につながる活動についてのアンケート」の実施

本校が重点研究として、ESDの視点をもった生活科・『横浜の時間』の学び作りを始めて、今年度で3年目に入る。また、昨年に引き続き今年度も、児童の委員会活動をSDG s 17の目標とつなげて展開してきた。

昨年度は、そういった活動を進めてきたことで児童の中にどのような変容があったのかを探るため、「SDG s 17の目標につながる活動についてのアンケート」を全校児童に実施した。

今年度も昨年度と同じアンケートを実施し、更に取組が進んだことにより児童がどのように変容してきたかを探ってみた。

SDG s 17の目標につながる活動についてのアンケート

①: SDG s 17の目標について知っていますか?

②: 学校の中に、SDG sのマークがはってあるのを知っていますか?

3年生以上では全員知っていた。17の目標の意味まで知っているのは高学年にいくほど多かった。(高学年での理解は8割)

③: 学校の中に、SDG sのマークがはってあることで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか?

水を大切に使う、ルールを守る、残さず食べるなど、学年問わず多くの回答があ

った。

④: 授業で、SDG sに関係する学習をしたことがありますか。

⑤: それはどんな授業でしたか。

⑥: その学習でうれしかったことや楽しかったこと、できるようになったことは何ですか?

主に生活科・『横浜の時間』で全クラスがSDG sに関わる学習を行った。うれしかったこととしては、地域の人とのつながりが深まったことや取組を家族に褒めてもらえたこと、色々なことを知っただけでなく、実践できたことなどがあ

⑦: その学習をしたことで、自分の気持ちや行動で変化したことはありますか?

野菜の学習をした低学年では野菜を食べたい気持ちが強くなったり、地域とのつながりが深まった高学年ではあいさつを進んで行うようになったりと、そのクラスの活動内容に深く関係した行動の変容が見られた。

⑧: すべての人々にとってより良い世界をつくるため、今の自分に出来ることで、何かやってみたいことや興味のあることはありますか?

低学年では、「もっとたくさん勉強したい」「生き物を大切にしたい」など児童にとって身近な内容が多かったが、高学年に進むにつれ、「ボランティア活動をやってみたい」「プラスチックをへらして海をきれいにしたい」などより広い視点での回答が増えていた。

4 ESDによって引き出すことができた価値 (evaluation=評価)

ESDの取組を行ってきたことで、児童が、世界には様々な課題があること、世界中の人たちが協力してその課題を解決しようとしていることを知ることができたということが、まずは大きな価値の一つだと思う。さらに、生活科・『横浜の時間』を中心としたESDに関わる学習活動に取り組むことで、自分一人の取組でも、世界が抱えている課題を解決するきっかけになるということを実感できたことも、価値の一つだと考える。

アンケートの結果からも、低学年から高学年へと進むにつれ、自分の生活に関わる身近な視点から、地域や社会へつながる広い視点で物事を考え、実践しようとする姿勢が見えてきた。他者とのつながり、他者への思いをもって日々の行動を選択していくことができる子どもたちが、これからの世界をより良いものに変えていってくれることを期待している。